

湘南医療大学
ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学
所 属 保健医療学部
リハビリテーション学科
名 前 神保洋平
作成日 令和6年9月29日

1. 教育の責任

本学での教育活動において、私は主に 2 年生を対象に、運動学Ⅰおよび作業療法評価学 身体Ⅰ・Ⅱを担当しています。運動学Ⅰでは、四肢の運動学の基本的な内容を教授し、学生が身体の動きに関する理論的な理解を深められるよう支援しています。また、作業療法評価学 身体Ⅰ・Ⅱでは、対象者の身体機能評価に関する基礎知識と実技を指導し、学生が実践的なスキルを身につけることを目指しています。さらに、実習ワーキンググループにおいて、実習指導や運営の改善を図るための取り組みを行い、学生の臨床教育の質向上にも貢献しています。これらの活動を通じて、学生が将来の専門職として必要な知識と技能を習得し、自立した作業療法士として成長できるよう、教育者としての責任を果たしていきます。また、個別相談や授業外活動にも積極的にに関わり、学生の成長を全面的に支援する体制を整えています。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

私の教育に対する理念は、学生が主体的に学び、自ら考え行動できる作業療法士を育成することにあります。そのためには、単に知識や技術を教えるだけでなく、学生が自分自身の学びに責任を持ち、実践を通して問題解決能力を培う環境を提供することが重要だと考えています。私は、教員として学生と対話し、彼らの個々の理解度やニーズに応じた指導を行うことを大切にしています。学生一人ひとりが異なる背景や学び方を持っているため、それに応じた柔軟な教育方法を取り入れ、学生の成長をサポートしていきます。

特に実習や評価学の授業においては、理論と実践をつなげる力を身につけることが重要です。私は、学生にただ指示を与えるのではなく、問いかけを通じて彼らが自ら答えを見つけるプロセスを尊重しています。このアプローチにより、学生は自信を持って臨床現場に立ち、クライアントに最適な作業療法を提供できるようになると信じています。

また、学生には挑戦を恐れず、自分の成長を楽しんでほしいと期待しています。失敗を恐れずに試行錯誤することが、将来的な成長に繋がると確信しています。私は、学生が自分の限界を超えて学び続ける姿勢を育むため、安心して失敗できる学習環境を提供することを心がけています。

私の理念は、学生が作業療法士としての知識と技術だけでなく、人間性や協調性、そして倫理観を備えた専門職業人として成長するために、全力で支援することにあります。

す。彼らの未来に向けて、自ら考え行動できる力を育むことを、教員としての使命と考えています。

2) 理念をもつに至った背景

私が現在の教育理念を持つに至った背景には、作業療法士としての臨床経験と、学生との日々の交流が大きく影響しています。臨床現場では、多様な患者さんと関わる中で、教科書通りの知識だけでは解決できない問題に直面することが度々ありました。患者さん一人ひとりが異なる背景やニーズを持っており、その都度、柔軟な対応が求められる現場で、私は「自ら考え、行動する力」の重要性を痛感しました。この経験から、学生にも理論だけでなく、実践を通じて問題解決能力を育てることの大切さを伝えたいと思うようになりました。

また、教育現場での学生との交流を通じて、個々の学生が異なる学び方やペースを持っていることに気づきました。一斉に同じ内容を教えるだけでは、全ての学生が効果的に学ぶことは難しいと感じ、個別のニーズに応じた指導が必要だと強く思うようになりました。特に、実習や評価学の授業で見られる学生の成長過程を目の当たりにした際、自ら考え、試行錯誤する過程こそが、彼らの本当の成長に繋がっていることを実感しました。

さらに、私自身も教育を通じて成長を実感しています。学生に問いかけ、彼らの疑問や課題に向き合うことで、私自身の知識や指導方法を絶えず見直す機会となっており、このプロセスを通じて、自分自身も学び続ける必要性を感じました。

こうした経験から、私は学生にただ知識を教えるだけでなく、彼らが自らの学びに責任を持ち、主体的に学び続ける姿勢を育むことが重要であると確信し、現在の教育理念を築くに至りました。

3. 教育の方法・戦略

私の教育の方法・戦略は、学生が主体的に学び、実践的なスキルを身につけられるよう、理論と実践を結びつけた指導を中心に据えています。そのため、授業ごとに明確な目標を設定し、学生が学びの成果を確認できるような工夫を取り入れています。また、単なる知識のインプットではなく、トレーニングの場として授業を位置付け、学

んだ内容が実際の臨床現場でどのように活用されるかを常に意識させるよう心がけています。

1. 教育方針

私の教育方針は以下の3つを柱としています：

1. **目標の明示**：各授業のショートゴールを明確（末尾資料1）にし、授業ごとに学ぶべきポイントや臨床における重要点、国家試験で求められる知識水準を提示します。これにより、学生がどこに焦点を当てて学ぶべきかを把握しやすくしています。
2. **理論と実践の融合**：教科書の内容を理解するだけでなく、それをどのように臨床場面で応用できるかを強調します。授業では具体的なケーススタディやシミュレーションを取り入れ、学生が実際の臨床場面を想像しながら学べる環境を整えています。
3. **内省と成長の促進**：授業後には振り返りの機会を設け、学生が自分の理解度を自己評価できるようにしています。Key Question（末尾資料1）や定期的なテストとの連動により、学習の進捗を確認する仕組みを導入しています。

2. 具体的な方法

● 授業ごとの目標設定とショートゴールの提示

授業の最初に、その日の学習目標を明示し、学生が学ぶべき知識や技能を具体的に伝えます。

● Key Question・振り返り用の動画を活用した教材の開発

授業ごとに重要な質問を提示し、学生が自分で考える力を養うための教材を開発しています。これらのKey Questionは、期末テストとも連動しており、授業で学んだ内容が理解できているかを確認する手段として活用しています。また、講義の内容を再度確認したい学生や欠席した学生のフォローアップのために動画を用意し、サポートラインを引いています。

● 授業内容と臨床現場を結びつけるイントロダクション

授業の導入部分では、私自身の臨床経験を基にしたエピソードを交え、作業療法士の視点から日常的な課題について冗談を交え紹介しています。具体例を挙げることで、学生がその内容に興味を持ち、授業に入り込みやすくしています。

● 授業中の確認と整理の「間」を設ける

授業中は、単に知識を一方向的に提供するのではなく、学生の表情や反応に気を

配りながら進めます。特に難解な内容を扱う際には、学生が理解できているかを確認し、質問を投げかけ、グループディスカッションを取り入れることで、学習の進行をサポートしています。また、適切な「間」を設けて、学生が自分の中で知識を整理できるようにしています。

- **授業をトレーニングの場として位置付ける**

知識のインプットだけでなく、実技やシミュレーションを通じて、授業を「実際に試す場」として活用しています。例えば、評価学の授業では、実際に学生同士で関節可動域の測定や筋力テストを行い、理論を実践に落とし込む体験を積み重ねています。これにより、学生は授業で学んだ内容をすぐに実践に移せる自信を持てるようになります。

- **自己研鑽の継続**

教員としての自分自身の成長も重要視しています。私は常に最新の研究や臨床情報を取り入れ、授業内容をアップデートしています。また、他の教員や臨床現場の専門家との交流を通じて、自分の指導方法や知識を見直す機会を作り、学生に提供できる教育の質を向上させるよう努めております。

3. 教育活動の工夫

さらに、授業外での活動も大切にしています。例えば、個別指導やオフィスアワーを活用して、授業内容の補足や、学生が抱える疑問に個別対応しています。こうした活動を通じて、学生が理解を深め、自ら学ぶ姿勢を支援することを心がけています。

これらの方法を通じて、私は学生が主体的に学び、自ら考え行動する力を身につけられるよう、全力でサポートしています。

4. 学習成果

- ・ 前任校で担当した運動学の全国模擬試験において、5年連続で関東甲信越エリア 1 位を獲得し、全国でも上位 10 位以内にランクインした。
- ・ 学生からの授業評価では「非常にわかりやすい」「理解が深まった」とのコメントが多数寄せられ、興味を持って学習に取り組む姿勢がうかがえる。
- ・ 授業内容を改善した結果、学生の国家試験合格率も向上し、実技試験での成績も安定して高い評価を得ている。
- ・ 教育活動を通じて、教材開発や教育法の工夫に関する論文を発表している。

5. 改善のための努力

- 小テストの成績において、一定水準の平均点を目指すだけでなく、学年内での

ばらつきにも着目し、ついていけない学生を減らす工夫を行います

- 授業運営において、情報過多になりすぎないように必要十分な内容を精査するよう努めていきます。
- 授業内容の分量や時間配分においては、授業計画やコマシラバスの作成と見直しを定期的に行います。

6. 今後の目標

短期目標（達成時期：2年以内）

担当科目である運動学において、全国模擬試験で学生の成績を上位 20 位以内に維持することを目指します。また、解剖学の積み残しを減らすため、運動学との科目連続性を強化し、カリキュラム内でトレーニング時間を確保する体制を整えます。

長期目標（達成時期：3～5 年）

評価学の演習から臨床実習までの実技スキルが学生に定着するよう、カリキュラムを一貫して整備し、実践的なスキル教育を強化することで、臨床現場で即戦力となる作業療法士を育成します。

【添付資料】

資料1 コマシラバスと Key Question・動画の QR コードの提示

第 4 回				
主題		上肢帯の筋学		
科目の中での位置づけ		本講義では肩関節の関節学、上肢帯の筋を学習します。講義目標は 1) 上肢帯の筋の作用を力学的に理解する、2) 上肢帯の骨、関節構造を踏まえて上肢帯の筋について学びます。		
コマ主題 細目	①	ベクトルの合成と分解	②	上肢帯の筋
	③	上肢帯内転作用	④	肩甲骨の胸郭安定作用
細目レベル	①	ベクトルは合成と分解が可能である。筋が発生させるベクトルの合成(合力)の結果、上肢帯の運動が成立している。力学の基本を確認する。		
	②	挙上：肩甲挙筋、僧帽筋上部線維、菱形筋 下制：小胸筋、鎖骨下筋、僧帽筋下部線維 外転：前鋸筋、小胸筋 内転：僧帽筋中部・下部、菱形筋 上方回旋：僧帽筋（上中下）、前鋸筋 下方回旋：肩甲挙筋、菱形筋、小胸筋		
	③	筋の起始停止から筋の発生させるベクトルを確認します。 上肢帯内転作用は僧帽筋中部、菱形筋、僧帽筋下部の作用によって成立する。菱形筋と僧帽筋下部のベクトルを分解した際に、上下に拮抗する力がある。この 2 つの拮抗する力は、上肢帯内転の際に、 <u>上下のプレを軽減</u> することに貢献する。		
	④	肩甲骨が胸郭に安定的に定位するためには、 <u>菱形筋と前鋸筋</u> の作用が必要である。この筋の 2 つのベクトルの合力は肩甲骨内側縁を胸郭に向かわせる。この筋のいずれか（もしくは両方）障害された場合、胸郭への固定性が低下し、肩甲骨が胸郭から離れる <u>翼状肩甲</u> と言われる状態となる。		
国家試験・臨床との関連		・筋の起始停止と作用・図から靱帯の名称がわかる 筋の作用は主動筋だけでなく、補助筋も含め出題される		
予習・復習課題		●Key Question （上肢帯の筋） Q1.上肢帯挙上に関与する筋（僧帽筋上部、肩甲挙筋、菱形筋）のベクトルを図示しなさい。 Q2. 上肢帯下制に関与する（筋鎖骨下筋、小胸筋、僧帽筋下部）のベクトルを図示しなさい。 Q3.上肢帯外転（前鋸筋、小胸筋）に関与する筋のベクトルを図示しなさい。 Q4.上肢帯内転に関与する筋（僧帽筋中部、菱形筋、（僧帽筋上部・下部））のベクトルを図示しなさい。 Q5.上肢帯上方回旋（僧帽筋上部、下部、前鋸筋）に関与する筋のベクトルを図示しなさい。 Q6.上肢帯下方回旋（菱形筋、小胸筋、肩甲挙筋）に関与する筋のベクトルを図示しなさい。 Q7.肩甲骨を胸郭に安定させる役割を持つ筋を 2 つ上げ、どのように安定させるかを筋のベクトルを図示して説明しなさい。 Q8.菱形筋と前鋸筋の麻痺が起こった場合どのような状態になるか？		

資料2 運動学外部模擬試験の結果

医歯薬 3 科目模擬試験 2年生

●全国OT総合順位

年度	参加数	合計	解剖学	生理学	運動学
2017年度	90学科	34	34	35	38
2018年度	90学科	76	69	73	79
2019年度	91学科	83	89	83	56
2020年度	99学科	13	23	23	4
2021年度	105学科	8	8	20	3
2022年度	118学科	7	9	51	4
2023年度	126学科	20	27	35	5

●関東甲信越OT順位

年度	参加数	合計	解剖学	生理学	運動学
2017年度	21学科	9	8	9	6
2018年度	19学科	17	17	15	17
2019年度	22学科	18	22	19	13
2020年度	22学科	2	3	6	1
2021年度	24学科	3	3	7	1
2022年度	24学科	1	3	16	1
2023年度	32学科	6	7	11	1

●偏差値

年度	合計	解剖	生理	運動
2017年度	46.8	46.8	48.5	44.9
2018年度	45.4	45.4	46.5	46.7
2019年度	42.6	42.7	44.4	46.3
2020年度	55.2	51.8	50.3	60.4
2021年度	56.8	55.9	51.5	64.8
2022年度	58.1	55.5	46.2	71.9
2023年度	52.7	51.2	48.5	59.0